

---

# 黒の放浪者

代継 洋佑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒の放浪者

### 【Nコード】

N34700

### 【作者名】

代継 洋佑

### 【あらすじ】

黒崎竜也くろさきりゅうじやは世界から取り残された。

世界は彼だけを残して消滅してしまった。

この事実を告げた神は、第二の人生を彼に用意する事にした。

こうして彼は放浪者となった。

【あらすじにプロローグの内容が含まれております。本文を読まれる際はあらすじを忘れてください。】

## プロローグ（前書き）

この作品が初投稿で処女作となります。

かなり説明くさい駄文になっていると思いますが、徐々に直っていくばいいと思います。

## プロローグ

いきなりの事だった。

彼は白い空間に存在していた。上も下も分からない。落ちているのか浮いているのかも分からない。

眩しい。痛い。気持ちいい。熱い。寒い。苦い。甘い。しょっぱい。苦しい。臭い。e t c . . .  
およそ経験できる感覚の全てが一気に襲い掛かってきた。

それだけじゃない。誰の記憶かも分からない、何の記憶かも分からない情報が、頭の中に入ってくる。余りの情報の多さに発狂しそうになる。

このままでは死んでしまう。どうにかしなければ。

しかし彼には何もできない。目を塞ごうとも、耳を塞ごうとも情報は絶えず彼に入ってくる。そもそも目や耳が一對ずつ付いているかどうかも分からない。

彼にはすでに何十もの腕や、何十もの目が付いていてもおかしくない、むしろ無ければおかしい位の情報が飛び込んでいたのだ。

しばらくして彼の体が、入ってくる情報の多さに膨らんだような気

がした。だが彼の処理できる情報量は変わらない。入ってくるモノは次から次へと脂肪のように蓄えられていく。

そんなことが延々と続いていた。

\*

「うおおあああああああああああああ！！！！」

溜めに溜め込んだ絶叫がようやく口から放出された。今吐き出されたモノはどの程度だろうか。100万分の1？100億分の1？足りない。と思ったが、肺の中にあつた空気を全て吐き出すと思つた以上にすっきりしている。

精神が落ち着いたところで、自分の置かれた状況に頭がいった。

「ここは・・・」

仰向けになつたまま久々に戻つた感覚で、状況を感じた。

真上に広がるのは巨大な木が作り上げる自然の日除けだった。枝葉の重なり合つた隙間からチラチラと日差しが零れて、目覚めたばかりの俺の顔に無遠慮に降り注ぐ。眩しさに目を細める。

ゆっくりと体を起こして現状把握しようとした俺は、目の前の光景に心を奪われた。

上空に広がっていたのは、どこまでも澄み渡ったスカイブルーの大空。所々に浮いた巻積雲がなければ白いキャンパスに書いた絵画と  
思ってもおかしくなかった。

俺のいる場所は緩やかな斜面にあるらしく、丈の短い芝草が緑の絨毯を広げていた。斜面を少し下ると平らな地面に変わっている。さらにそこから少し進んだ場所から、砂利や石の目立つ川原へと変わっていく。その向こうには大きな透き通った川が向こう岸とこちらとを両断していた。

川を渡った向こうには、赤・黄色・オレンジ・白など目に鮮やかな花々が咲き誇っていた。テレビでオランダのチューリップ庭園や富良野の花畑などを見ていたが、それと比較していいのかと言うほどの規模だった。少なくとも川の向こうにある大地の全てが花で覆われている光景など俺は知らなかった。

ふと川原の端のほうに目をやると、出来たばかりだろう真新しい浅橋が掛かっている。浅橋の先端にはロープで？がれた木製の手漕ぎ舟があり、オールが放り込まれているのが見えた。

ザザザザアツ・・・

風に吹かれて擦れた枝葉が、耳に心地よいBGMを届ける。草原全体がざわめいて、緑の大河の中にいるように感じられた。爽やかに駆けていく風が俺の髪を撫でていく。

余りの心地よさにここがどこかという思考を停止させ。しばし呆然としていた。

「仏教の教えでは死後の世界に行く儀式として『三途の川』という物があるそうだね」

突然後ろから声をかけられ、再び思考が再開する。

「『大きな河』『花畑』『渡し舟』。キーワードから作ってみたけど、中々良い物だね」

声が聞こえた方向を振り向いた。

「君の記憶にあるモノと比べてどうだい？」

そこにあつたのは大きな一本の広葉樹。その根元に腰を降ろした男が声を掛けてきたようだ。

俺はそこにいた彼の姿に驚いた。

履き心地のよさそうなスニーカー。細身で足のラインに沿ったスリムジーンズ。意味の分からない英語のロゴが入った白いTシャツ。その上に合わせられたフードのついた黒いジャージ。ポケットから飛び出て、首にぶら下がった黒のヘッドホン。

それなりに整った目鼻。人並みに手入れの整った肌。多少癖のある黒い髪の毛。そのどれもが見覚えのあるモノだった。忘れることは無い。なぜならそこにいたのは……

「……俺？」

そこにいたのは紛れも無く今の俺自身だった。見間違えは無い。毎朝、顔を洗ったびに鏡に映るのを見ている。髪をセットする時。公衆トイレの洗面台で手を洗う時。あらゆる場面で事細かに見てきたモノと寸分変わらない、正真正銘の自身の姿だ。

そこにいた彼は啞然とした俺を見て、ああと一言呟き言葉を続ける。

「この姿かい？僕の姿は君には『情報量』が多すぎるようだからね。他の姿を知らなかったから、勝手だけど君の姿を借りさせてもらったよ。」

彼は何でもないかのように答えた。そして徐おもむろに起き上がった彼は、尻に付いた土を叩いて落とす。そして親指を立て、自分の後ろにある大木の方向を指した。

「詳しい話は向こうでしないか？何か飲み物でも飲みながらゆっくり話したほうが良い」

そう言った彼は、啞然とする俺を置いて大木の向こう側へと歩いていった。

次々に起こる出来事に頭がついていかない。状況が全くつかめない。なぜここにいる？ここはどこだ？彼は何者だ？

様々なことが解決できない問題として巡る。ただ分かっている事が一つ。答えは彼が知っている。そう考えた俺は彼の後についていく。

\*

彼の向かっている方向からすると、どうやら丘の頂上で話をするようだ。彼の背中はずかに遠く、遅れないようにとやや小走りに後ろを追った。後ろを振り返った彼は、俺がちゃんとしてきている事を確認すると薄く微笑んだ。

そこにたどり着くのに、そんなに時間はかからなかった。丘の向こうには一面に草原が広がっていて、風が吹くたびに草原がざわめいた。すばらしく爽やかな光景に、その意外な物があった。

大自然のど真ん中にあつたのは、ガラス製の長方形のテーブルだった。四角いガラスの天板の下を、左右が湾曲した長方形の台座に足が生えた物が支えている。その両脇に存在感を主張するのは二つの白い大きなソファ。大きなクッション枕を繋ぎ合わせたような、全体がふかふかした2人用のソファ。それがガラステーブルを挟んで2つあるのだ。ここがマンションなどの屋内なら完璧だろうが、このシチュエーションでは完全に浮いてしまっている。

テーブルの上には白い陶器製のティーセットが並べられていた。ティーポットは洋梨型ヨリナシの蓋のほうが細いタイプで、小さなティーカップがソーサーに乗っているのがこだわっている様に見える。少なくとも俺はここにある様なお洒落なモノは持っていない。

彼は向かって奥のほうにあるソファに沈み込むように深く座り込んだ。実際沈んだ。黙って立っている

俺を見て、彼は右手を目の前にあるソファに向けた。

「どうしたんだい？座りなよ。」

彼に促されて戸惑いながらソファーに腰を沈めた。上質な物らしく、全身が抵抗も反動もなくすんなりと沈み込み、かつ沈みすぎない絶妙な感触だった。

彼は俺に座る事を進めた後、ガラステーブルに載ったティーポットを掴んだ。そのままティーカップに注ぎ口を近づけ、黄金色の透き通った液体を流し込んだ。いつ準備していたのかは知らないが、ティーカップからは淹れたてのように湯気が立っていた。

彼は淹れ終わった2つのティーカップのうちの1つをこちらに差し出した。

「まあ、とりあえず飲んで」

俺は促されるままにティーカップを掴んで、ゆっくりと口に近づけた。黄金色の液体はオレンジティーらしく、鼻先にオレンジの爽やかな香りが漂ってくる。口に含むと爽やかな柑橘系のフレーバーが口内に広がり、鼻の奥に広がっていく。

どこまでも広がるような大自然の開放感の中で飲むオレンジティーは素晴らしい物で、これでテーブルクロスの掛かった円形のテーブルと背もたれの付いたお洒落な椅子でもあれば完璧だと思った。でも全身リラククスできる上質なソファーに座っていると、コレはコ

レで最高のシチュエーションに思える。

俺が飲み終わったティーカップをソーサーに載せると、彼が口を開いた。

「落ち着いたようだね」

「はい。でも、聞きたいことは山ほどあります。知ってるんですよね？」

「ああ、順を追って説明するよ。その為に『ここ』を用意したんだし」

そう言った彼は半分残ったティーカップをソーサーに戻すと、ソファに体全体を沈めた。

「まず、僕が君を見つけた所からかな。覚えてる？あの空間」

その一言に記憶が蘇った。全身に突き刺さる様々な感覚、記憶。思わず背筋が震えた。

「・・・ええ、覚えてます。あの空間は何だったんですか？」

「ん〜、何と言ったらいいのか。『高次元空間』『神域』『原初の世界』とか。大量の情報みたいなエネルギーみたいな、そんなの

の塊かな。正直、驚いたんだよ。まさか『低次元』の存在が、あの空間に放り出されて消滅しないで残っているなんてね。」

「低次元……」

「まあ、あと少し遅れていたらすすがに溢れて『破裂』していただろうけどね。とにかく、そこで君を見つけたんだよ。そのままそこにいたんじゃないや消滅してしまうから、まずこの『世界』を作り出して君を助け出した。それでいらぬ所を取り出してって存在を安定させた訳だ」

「世界を作った……」

「ああ、そうか。根本的な所を話してなかったのか。というか僕の姿を見て見当がつくだろうけど。そうだな、『高次元の存在』『観測者』『加護を与える者』ここだけに限定すれば『創造主』って言うのも当てはまる。一番分かりやすく言うと『神』とかかな。」

「神さま……」

「ああ、『さま』なんて使わなくていいと思うよ。君はどうやら『加護』のない世界から零れ落ちたみたいだから僕は何もしていないし。僕をしている事なんて、自然に発生する世界の中から目に入ったモノだけに加護を与えて、その後の反応を楽しんでるだけなんだしさ。」

「はぁ……」

いきなりとんでもない事を言い始めた。『高次元空間』『神域』

原初の世界』『加護』そして『神』。  
ありえない。でも彼の姿をどう説明する。特殊メイク？わざわざ俺の為にする理由が無い。それに今までいたあの空間は説明できない。あんな物、どうやって用意する。不可能だ。まあ、別にいい。全て認めようじゃないか。重要なのはそこじゃない。問題は……

「あ……」

「ん？何？」

「助けていただいてありがとうございました。それで、迷惑ついでと言うのも何なのですが元の世界に帰して頂けないですか？」

「ああ、その事なんだけどね……」

そこで神は言いよんだ。嫌な予感がする。

「……もしかして帰す方法がないとか」

「いや、そうじゃないんだ。君の体を修復した時に『世界』の情報は掴んでいるから、どこに存在している世界でも瞬時に帰すことができる」

「じゃあ」

「ないんだよ」

「え？」

「もう君の世界は存在していない。世界の寿命が来て、自然消滅してしまっただけだ」

一瞬何を言っているのか分からなかった。しかし彼はちゃんと聞いた。俺の世界が、もう存在しないと。

「・・・いやいや、世界の寿命？あり得ないじゃないですか。だって、詳しいことは知らないですけど、地球の寿命ですら億単位の時間があるんですよ？そんなの俺が生きてる筈ないじゃないですか」

「それなんだけど、時間の速度が違うって言うのかな。あの空間にいと時間の流れが全く違うんだよ。あそこから見ると世界の寿命を見取るなんて簡単な事なんだよ。『浦島現象』といったかな？あれだよ。アインシュタインの『特殊相対性理論』の【光の速度で移動する物体は、外より時間が遅く流れる】というアレ。本当は全く違うんだけど、イメージ的にはそんな感じ。知ってるだろ？これは君の記憶にあった事だ。」

「でも僕も世界の一部ですよ。外に出ても同じなんじゃ」

「世界を覆っている膜みたいな物があつて、それが時間の停滞から守っているんだよ。世界に発生している物だから、その外にいた君には影響がなかったみたいだね」

あり得ないと思った。でもあの異常な空間の事だ。何があってもおかしくない。

「・・・じゃ、じゃあ世界を作り出すとかは？さつき、この世界を作ったって言いましたよね？その力を使って俺の世界を再構成するみたいな事は」

「それも無理。寿命の来てしまった世界は全ての情報やエネルギーを分解されて、あの空間に混じってしまう。僕は完全に一から世界を作ることとはできても、消滅してしまった世界を修復すること事はできないんだよ。それに言ったよね？君の世界は加護を受けていないって。そもそも加護を受けていない世界は発生してもすぐに消滅してしまう程、<sup>はかな</sup>儚いのが普通なんだ。加護を受けずに成長していきほど強い世界なんて僕でも無理だ。というか僕に作れるのは加護を与えた世界だけだ。おそらく君が存在していられたのも加護のない世界の住人だったからなんだろうね。」

信じられなかった。違うか。信じたくなかった。

俺の居た世界がもう無いって？もう戻れないって？何でこうなった？俺が何をした？何か悪いことをしたか？それとも運が無かったってのか？あの家に帰れないのか？あの学校に行けないのか？親父は？母さんは？学校のやつらは？みんなにもう会えないのか？

いろんな事が頭を巡る。

普通なら発狂とかするんだろうか。それとも安心して灰のようになるんだろうか。でも俺の心はどれでもなかった。あの空間にいた所為で、感情がおかしくなったんだろうか。異様なまでに状況を冷静に見ている。彼の言うことがすんなり入ってくる。

しばらく思考に専念していると、神が話を切り出した。

「そこで相談なんだけどね。もう一度世界に生きてみないかい？」

「……はい？」

突然の提案に、一瞬思考が停止してしまった。

「だから、もう一度別の世界で生きてみないかって。まあ加護のない世界は無理だけど、僕の加護の効いた世界で良ければ転送することができる。君もこんな誰もいない所に放り出されるのはイヤだろうっ？」

「……いや……あの……」

「自分の居た世界が無くなったのはつらいだろう。でも、まだ生きたいだろう？まだ知りたいだろう？まだ経験したい事があるだろう？まだ15歳なんだ。君の知識の中では、15歳と言うのは成長しきっていない状態らしいじゃないか。だったら生きるべきだ。生き

て世界を知るべきだ。」

「世界を知る・・・」

「そうだ、これを巢立ちのようなモノと考えてもいい。君の世界にあっただろう？小学校から中学校、中学校から高校と。成長して大人になれば、社会に出て一生会わない人も出てくる。生活環境がガラリと変わる事もある。外国で結婚すれば母国語すら使わない事もある。少々早いけど、巢立ちの時が来たんだよ。」

神の言葉が、俺の心にじつくり浸透してくる。そうなんじゃないか。これは形が違うだけで、誰もが経験する些細なことなんじゃないか。何も前の世界にこだわる必要なんてないじゃないか。

「・・・巢立ちですか・・・そうですね。戻らない時間に囚われるより、ポジティブにそう考えた方が利口かもしれない。」

「うん、決心してくれて良かったよ。っと、母国語で思い出したけど、今のままじゃあっちの言葉対応できないでしょ。」

「ああ、そうですね。なんとかできますか？」

「と言うと思ってね。実は君を修復したときに言語器官をちよつと弄っておいてね。母国語を使う感覚で向こうの人たちと会話できるようにしといたよ。まあ、いらぬ部分を捨てた事で余った部分がいっぱいあったからね。ああ、そうだ。膨らんだ君の要領がそれだ

けじゃ足りない過ぎるから、僕に加護を詰め込んだよ。物質的なモノにすると、自重で死んじゃうだろうから」

「・・・なんだか、『異世界召喚モノ』の主人公みたいな展開ですね。神様現れて、最強に改造されて。それで異世界に飛んで活躍するみたいなの」

「テンプレって言うんだっけ？だったら、君が主人公っていうのは正解だね。幸か不幸か、君の中にあるモノは誰にも手に入れられない力だ。誰にもできない事が、君にはできる。さしづめ僕は君が主人公として活躍する小説を楽しんでいる読者の一人かな？」

すると、神は徐に<sup>いせ</sup>ポケットから携帯を取り出した。時間を確認しただけらしく、すぐに折りたたみ式のそれをポケットに仕舞う。

「うん。じゃあ、これで説明終わりっつと。」

そう言って勝手に終了宣言した神は、ゆっくりと背伸びをして体を解しだした。

「はい・・・って、え？」

突然の終了に思わず間抜けな返事をしてしまった。もちろんまだ聞き足りない俺は納得できなかった。

「あの、行き先の情報とか世界の説明とかは・・・」

「ないよ。だって、全部知ってたら面白くないでしょ？僕が。大丈夫、なんとかなるよ」

「いや、なんとかって」

なんとか説明をしてもらおうと、ソファアを立ち上がろうとした。だが、妙に体が重い。そういえばさっきから思考も単純になっていくような気もする。力の入らない体はゆっくりと傾いて、大きなソファアにトサリと沈んでいった。

倒れこんだ視界の中、神がソファアから立ち上がって俺のほうに歩いてくるのが見えた。そして俺の前に立つと、その首に架かった黒いヘッドフォンと、それに繋がった見覚えのある銀色の物体をポケットから取り出した。

「これ、饞別ね。っていうか君のだけど。バッテリーは君の力で補充できるように改造しといたから、永久に使えるよ」

それは俺が持っていたI podだった。いよいよ意識がなくなるといふ中、首に何かが架かったような感触と、ジャージのポケットが少し重くなっただかという違和感だけが感じられた。

「じゃあ、一読者として君の活躍を期待しているよ」

消えていく意識の最後のほうで、神がそんな事を言った気がした。

\*

大自然のど真ん中に置かれた近代的なガラステーブルとソファー。そんなアンバランスな場所にただ一人、神だけが存在した。世界から取り残された不幸な少年の為だけに作られたこの場所は、彼の転送によってすでに存在理由を失っていた。もうしばらくすれば神もここを立ち去り、その瞬間この世界は消滅する。

はかな  
儂く散ってゆく世界に思いを馳せてか、自分の作った世界に浸ってか。ソファーに座りなおした神は、ティーカップに入った残りのオレンジティーを口に含んだ。そうしてゆっくりと飲み干した後、ティーカップをソーサーに戻す。そしてポケットから何か透明な液体の入った小さな小瓶を取り出した。

「結構効くなあ、これ。」

どうやら小瓶に入っているのは鎮静剤のような物らしかった。少年が妙に聞き分けが良かったのも、突然意識が薄らいでいったのも、これのおかげだったらしい。

ポケットから出した小瓶をテーブルに置いた神は、誰もいなくなっ

た向かいのソファーに目をやった。

そして、今はここにいない彼に語るようにポツリと呟いた。

「楽しみにしてるよ。黒崎竜也くろさきたつやくん」

## プロローグ（後書き）

最後まで読んで頂いて、ありがとうございます。

結局、彼の名前を最後の最後で出す事になってしまいました。

（っっていうか、プロットもなんも考えてなかった・・・）

設定的に無理のあるところは申し訳ありません。

次回はなんとか登場人物増やせるように努力します。

e p 1 美少女(前書き)

だいぶ更新が遅くなりました。

納得のいく物ができなくて・・・

短い物ですが、どうぞ。

ホウ・・・ホウ・・・

ウワウウ・・・ワウウ・・・

遠くから聞こえる獣の鳴き声に、竜也の意識は覚醒した。瞼まぶたを開くと、目の前には湿った枯葉の地面が見える。完全に目覚めた彼が立ち上がって様子を確かめると、そこは鬱蒼とした森の中だった。

「ここは・・・」

この場を陰鬱と印象付ける主な要因は、森全体のトーンを落としたような薄暗さだ。原因は分かっている。視界にあるだけで100や200を下らない膨大な量の原生林の所為だ。

タイヤのホイール程の太さをした丈夫な幹は、まるで素潜りで水深60m以上の深さに挑戦するフリーダイビングのロープのように真っ直ぐ伸びている。そして水面に当たるであろう上空は、我慢していた息継ぎをするかのように四方八方に枝葉を広げていた。

密集した場所に生えた広葉樹らしきそれは、互いが互いの領域を侵して1つの巨大な屋根となっていた。屋根の隙間から漏れ出た光が

湿気を含んだ空気に当たって、光筋をぼんやりと見せている。光のほとんど届かないその光景は、さながら太陽の恵みを拒絶した深い深海のようだ。

暗い海底にも思える地面には、至るところにシダ類の植物が自生している。太陽光の差し込むべき上空には巨大な屋根が出来ているので、光合成を必要とする植物は繁殖できない。だが、シダ類には関係ないようだ。その反面に湿気が必要とするのだが、光が届かない所為で蒸発できなかつた水分が空气中に充満していて問題はなかつた。

全体として薄暗く陰気なそこは、富士樹海や中世に恐れられた深い森といった恐ろしさがあつた。

「転送するにしても、場所を考えてくれないかなあ・・・」

と愚痴を零した竜也だったが、同時に諦めてもいた。会って少ししか話をしていない神だったが、どうも彼にとってこの世界は暇つぶしでしかないようだからだ。もしかしたら、考えた上でここに転送したのかもしれない。

ハアと、ため息を1つ吐く。此処にいても仕方ない。そうと決めた竜也は、とりあえず前に進む事にした。前に進むのだが、その方向に森の出口があるとは限らない。そもそも方角も分からないのだから、ちゃんと前に進んでいるのかも分からない。

群生して茂みとなっていたシダ植物が、竜也の歩みを妨げる。日光の差し込まない暗い森の中では、茂みの生えている場所の地形など分かる訳もない。竜也は足元の見えない状況の中、茂みを掻き分け前へ前へと進んでいくのだった。

しかし竜也は、歩くうちにある違和感を覚えた。長時間歩いても疲れていないのだ。歩き始めて20分位した頃に、自身の体に疲労の兆候が全くない事にふと気づいた。山歩きなど経験した事の無い竜也は、本来ならば歩きなれない地面に悪戦苦闘して疲労困憊こんぱいしていなければおかしい。これが神の言っていた『加護』というモノなのだろうか。

幸運な事態に喜んでいた竜也だったが、精神的にはそろそろ疲れ始めていた。2・30分もの長い時間、ただひたすら歩き続けるのは非常に辛い。暗い森の中を一人行軍するのに限界を感じ、もういいかとポケットに入れていたI podを取り出した。物音を聞き逃す可能性があるので使わずにいたのだが、そろそろ人の声が聞きたくなってきた。

I podの液晶画面に表示されるメニューの中から、ミュージック、アーティストと選んでいく。竜也はその中からアニソンを開き、ジャンル分けした中のバトル系アニメの主題歌を再生した。とあるアニメの外伝として作られたシリーズで、個人的にはいらな**い**と思っていた。ただオープニングのテンポの良い曲調と、主人公をしている声優の女性ボーカルが噛みあっていて耳に心地よかつた。

アップテンポのビートが流れるヘッドフォンを首に掛けたまま、テ

ンションの上があった竜也は意気揚々と森の奥へと進んでいった。

\*

歩き始めて1・2時間経ったかという頃だった。

ランダムに設定してあるI podの選曲はメロディアスなレゲエを奏でていた。

ゆったりとした流麗なベースが、女性シンガーのハスキーボイスに甘く絡み合う。

後ろのほうで軽快なリズムを刻み続けるジャズドラムが耳に心地よい。

夕焼けの似合うハワイアンビーチの情景が目浮かぶようだ。

すでに日が暮れ始めているらしく、枝葉の間から零れる光の筋も薄くなったように感じる。あと1時間もすれば暗い森の中は、完全な闇を纏って身動きするのは不可能になるだろう。竜也としては、この得体の知れない森の中での野宿は遠慮したい。一刻も早く人里に出たい一心だった。

レゲエの演奏も終盤に差し掛かり、余韻を楽しむようにドラムのソロのみになった頃だった。

そんな願いが通じたのか、遙か前方の木々の合間に動く影が見えた。鬱々とした雰囲気の中で意気消沈していた竜也は、暗い闇の中に見つけた一筋の希望の光に歓喜した。思わず歩く速度にも、逸る

気持ちに乗ってくる。通常の速さから早歩きへ、早歩きから小走りへと。茂みなど最早ないのと同じだった。やっと人影だと理解できる距離になって、竜也は大声で呼びかけた。

「オーイー！」

移動をしていた人影は、掛けられた声にその動きを止めた。しかしこちらの姿が捉えられないようだった。声の正体を獣の鳴き声と思っているのか、呼び止められた人影は手に持っていた何かをこちらに突き出していた。竜也は警戒を解くため、もう一度声を掛ける。

「オーイー、待ってくれ！俺は人だ！」

「来ないで！そこで止まんなさい！」

女性特有の甲高い大声で返された返事は、明らかな拒絶だった。というより、冷静に考えれば当然の事だった。ここ1・2時間の探索で分かったが、基本的にここは人が入ってくる場所ではない。そんな秘境ともいべき場所に理由もない人間がいる訳がない。それも自分の知らない人間に呼びかけられるのだ。警戒しない訳がなかった。

しかし冷静ではなかった竜也は、彼女に手に持った武器で威嚇されるまでそこに気づく事が出来なかった。もっとも分かった所で結果は似たような物だったろうが……

「ま、待ってくれ！俺は別に敵じゃない！」

「敵じゃない？だったら何故こんな辺鄙な場所にいんのよ！」

彼女は手に持った鉈なたのような物を此方に突きつけた。というか鉈以外の何物でもなかった。長さ20cm程の木製の柄。その先に付いた黒い長方形の刀身。刃先は銀色の地の色が出るまで研がれた状態だ。本来は切り出された丸太を刀身の重さで叩き割る代物なのだが、その対象が丸太ではなく人間の頭部に代わったらと思うと背筋に寒気が走る。

とりあえず斬られては堪らない竜也は両手を挙げて降伏の合図をする。果たして通じるのか否か。・・・

「あ・・・ま、迷ったんです。旅をする途中で道に迷ってしまった。」

構えられた鉈はその位置から動かず、とりあえずは話を聞いて貰えるようだった。しかし警戒心が解かれた訳ではなく、突きつけられた鉈は一向に引く気配を見せない。とは言えいきなり殺される可能性が薄まった事で内心ホツとした竜也は、そこで初めて鉈を突きつけてくる少女の容姿に目が行った。

身長は160cm程だろうか。175cmの竜也と比べると、頭一つ分ほど低いように見える。綺麗に流れる金色の髪は、ショートボ

ブにカットされていた。さらに印象的なのがその瞳だ。綺麗なスカイブルーの瞳は差し込んでくる光筋に照らされ、ブルートパーズのような神秘的な輝きを放つ。鼻筋はスツとした綺麗な形をしており、顔立ちも少女らしい柔らかな童顔をしている。

服装は汚れてくすんだ白のシャツ。下も同じような白のスカートだろうか。その上に濃い深緑色をしたエプロンドレスをした、どこかフィンランドの衣装にも似ていた。その姿は童話の中にのみ存在する天使か、もしくは魂を得て動き出したフランス人形ではないかと思っほどの美だった。

ほぼ完成した美を持つ彼女は、訝しげな表情をして言葉を続けようとした。

ギヤギヤーン！ギューーーン！  
タタスタタン！タタタスタタン！

突然、首に掛けたヘッドフォンから爆音のギターとドラムが鳴り響いた。

彼女はビクリと体を引いた。その瞬間、彼女の視線が突き刺すように竜也を貫く。

鉦を持つ手が硬くなる。動揺した彼女の声が竜也に問う。

「あ、あんた何をしたの！？それはなに！」

「いや、これは」

続けようとした瞬間、彼女の鉈が振り上げられた。斬られる！  
竜也はとっさに後ろへと飛び退く。

振り下ろされた彼女の鉈は、予想通り竜也の居た場所を通り過ぎた。

「ちょ、待っ」

「魔法かなんか使ったのね！油断させた所を叩くわけだ！この盗賊め！」

彼女は次撃を続けるため竜也に詰め寄る。

振り下ろされた位置をそのままに、左下から右横へ。

肘に力を込め、また右上から左下へ。

「このっ！」

駄々をこねる子供のような素人の振るい方だった。

冷静に対処すれば竜也にも十分組み伏せられる筈だった。

しかし素人は竜也も同じ。格闘経験など、中学のときに入っていた柔道部くらいなモノだ。

刃物を持った相手との戦闘など『平和日本』ではあり得ない事態だ。

「うおわっ!？」

刃物の恐怖から身を奮い立たせ、視界に相手を入れたままバックステップで避ける。

後ろを見せれば背後から斬り伏せられる。視界から外れば対処が  
出来ない。

とにかく後ろへ。相手の射程圏外へ。

「くっ、時間を稼ぐ気!？」

時間を掛ける訳にはいかない。そう判断したのだろう。

彼女は鉈を振るうのを一旦止め、まず竜也を捕まえる事に専念した。当然、迫る速度は上がる。

「いつ!？」

突然の接近に焦り、竜也の足運びが雑になった。

足場の安定しない森林の中で、動きが雑になれば足を捕られる。そして案の定、その時は来た。

「あっ!」

長時間の歩行で解けたのだろうか。

解けた靴紐が茂みの一部に引っかかり、竜也は動きを止めた。これ幸いと、少女が鉈を振り被る。

「やった!」

彼女の振り被った鉈が振り下ろされる。

体を中心に左肩を引いて、右肩が前に出る。背中に隠された刀身が姿を現す。

その様子を竜也はしっかりと見ていた。

これが極限の集中力と言う物なのか。

振り被った鉦は、ようやく頂上を通過した所だ。

彼女の綺麗な髪が、動きによって弾む様子が鮮明に見える。

ヘッドフォンから流れる音がスロー再生になっていた。

前にテレビでやっていた『1秒の世界』が現実起こっていた。

緩やかに進む時間の中、冷静になった竜也は動き出した。

倒れかけた体を左足で踏ん張り、そのまま前に踏み出す。

右足を、彼女の右足の前へ。

振り抜かれた鉦の持ち手を、左手で掴み引っ張る。

そのまま体を反転。

余った右手を彼女の脇に滑り込ませ・・・

投げた！

それは綺麗な一本背負いだった。

腰を屈めた勢いで持ち上げられた少女は、足元の地面から引き剥がされる。

少女の体を担いでいるのを、竜也は背中に掛かる重量で感じていた。

少女の足が綺麗な放物線を描き、上下が逆さまになる。

背中に掛かる体重がなくなった感触に、竜也の3年間の経験が完全

に決まる事を教えた。

そう確信した瞬間、ゆっくりと進む時間が戻っていくのを感じる。

竜也は感覚の加速化により、一瞬自分の腕が振り回されたと思えた。

ガサガサッ！

ズダンッ！

竜也の予想通り、彼女の体は地面に叩きつけられた。

茂みによって多少は衝撃を緩和できたようだ。死んではない。

突然叩きつけられた事で、握っていた鉈は手から零れ落ちていた。

そして長年の経験と自己防衛の意識により、竜也は動き出す。

突然の衝撃に身動きの出来ない彼女に、即座に歩み寄った。

そして仰向けあおむになった彼女の首に右腕を潜らせる。

彼女の左腕を左の脇に抱え込むように押さえた。

最後に彼女の上に押し掛かるように体重を掛ける。

柔道の押さえ技 袈裟固めだ。

これが決まると、まあ身動きは取れない。

首を持ち上げ体重を掛ければ、肺にある空気は強制的に排出される。

スポーツかもしれないが、拘束する技術としては十分だ。

「ゴホッ！は、離せ！」

ようやく抵抗し始めた少女だったが、押し退けようとも跳ね起きようともビクともしない。

体だけに乗っけているように見えるが、実際は違う。

両足を大きく開いたそれは、相手を地面に縛り付ける杭だ。

抵抗を続けた彼女だったが、しばらくすると諦めたように動かなくなつた。

ようやく話が出る。そう思って竜也は口を開いた。

「離すわけないだろ？とりあえず話を・・・」

「・・・うっ」

続けようとした言葉は、彼女の震える声に止められた。

暗い森の中でさらに姿勢の低い状態なので、彼女の表情を確認するのは難しい。

しかし注意してよく見ると、その顔は大きく歪んでいた。

眉間には皺しわが寄り、頬の筋肉に鼻が持ち上げられる。

きつく結ばれた唇はめくれ上がり、瞳からは涙が溢れ出ていた。

「あぁっ！ごめん、その・・・」

目の前で襲撃者だった敵が、ただのか弱い少女になってしまった。

あまりの変貌に、竜也は慌てて構えを解いた。

「っふうふう・・・!!」

離しても彼女が反撃に移る気配がない。

自由になった両手は、歪んだ顔を覆い隠した。  
押し出される声は次第に大きくなっていく。

泣いている女の子の慰め方など知らない竜也は、目の前の状況に才口オロするしかなかった。

ep1 美少女(後書き)

短くてすみません…

とりあえず切れる所で出してみました。

作品内に出てきた『とあるアニメ』は、まあ想像通りのアレです。

評価はまあ、人それぞれって事で。

もう1つのレゲエは、サムライチャンプルーの『四季の歌』がイメージです。

でもあれって最後まで結構な音量なんだよな…

まあイメージって事で。

それにしても魔法出てこないなあ…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3470o/>

---

黒の放浪者

2010年10月22日14時58分発行